

国枝史郎

神州纈纈城

桃源社・刊

神 州 瀨 瀨 城

<検印省略>

著 者 国枝史郎

定 価 六八〇円

昭和四十三年八月十五日 発行

昭和四十四年十月二十日 六刷

発行者 矢貴昇司

印刷者 川瀬壬子

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目十二番地

振替口座東京六四三五一

目次

神州纈纈城	1
-------	---

「苦樂」自大正十四年一月至同十五年十月連載

暁の鐘は西北より	207
----------	-----

「文芸春秋」自昭和二年六月至同年十二月連載

解説	303
真鍋元之	

神

州

額^こ

額^け

城

「苦樂」自大正十四年一月至同十五年十月連載

第一回

土屋庄三郎は邸を出てアラアラ坊を彷徨った。

高坂邸、馬場邸、真田邸の前を通り、鍛冶小路の方へ歩いて行く。時は臘月の春の夜でもう時刻が遅かったので邸々は寂しかったが、「春の夜の艶かしさ、そこはかとなく匂ひこぼれ、人氣なければ賑かに思はれ」で、陰気のところなどは少しも無い。

「花を見るには何方がよからう、伝奏屋敷か山県邸か。」

鍛冶小路の辻まで来ると庄三郎は足を止めたが「いっそ神明の宮社がよからう。」

斯う呟くと南へ折れ、曾根の邸の裾を廻わった。

併し、実際は何処へ行こうとも又何処へ行かずとも、花はいくらでも見られるのであった。月に向かつて夢見るような大輪の白い木蘭の花は小山田邸の塀越しに咲き下を通る人へ匂をおくり、夜眼にも黄色い連翹の花や雪のように白い梨の花は諸角邸の築地の周囲を霧のように暈している。桜の花に至っては、信玄公が好まれるだけに、鵜飼ヶ崎の御館を巡り

左右前後に延びている此の甲府の到所に爛漫と咲いているのであったが、わけても御館の中庭と伝奏屋敷と山県邸と神明の社地とに多かった。

「花を踏んで等しく惜しむ少年の春。燈に反いて共に憐れむ深夜の月。……あゝ夜桜はよいものだ。」

小声で朗詠を吟じ乍ら、境内まで来た庄三郎は、静かに社殿の前へ行き、合掌して叩頭したが、

「御館の隆盛、身の安泰、武運長久、文運長久。」

こう折って顔を上げて見ると、社殿の縁先狐格子の前に一人の老人が腰かけていた。臘月臘月の月の光も家根に遮られて其処迄は届かず、婆娑として暗い其の辺を淡紅色に仄かせて何やら老人は持っているらしい。

大方参詣の人でもあるらう。——斯う思つて氣にも止めず、庄三郎は足を返した。

と、うしろから呼ぶものがある。

「もし、お若いお侍様、どうぞ鳥渡お待ち下さいまし。——それは暖れた声である。」

で、庄三郎は振り返った。

山袴を穿き、袖無を着、短い刀を腰に帯び、疊んだ烏帽子を額に載せ、輝くばかりに美しい深紅の布を肩に掛けた、身長の高い老人が庄三郎の眼前に立っている。

「老人、何か用事かな？」

庄三郎は訊いて見た。

「布をお買い下さいまし。」

おずおずとして老人は云う。

「おお、お前は布売か。いかさま紅い布を持って居るの。」

「よい布でございます。どうぞお買い下さいまし。」

「よい布か悪い布か、そういうことは俺には解らぬ。」庄三郎は微笑したが「俺は是でも男だからな。」

「お案じなさるには及びませぬ。布は上等でございます。」

老人は執念く繰り返す。

「そうか、それでは左様いうことにしよう、よろしい布は上等だ。併し、俺には用は無いよ。」

云いすて庄三郎は歩き出した。

併し布売の老人は、そのまま断念しようとはせず、行手へ廻わって復た云うのであった。

「布をお買い下さいまし。」

「見せろ！」

と庄三郎は我折れたように、遂々斯う云って手を出した。

「成程。むうう。美しい色だな。」

渡された布を月影に隙かし熟々と眺めた庄三郎は思わず感嘆したのであった。

「はい美しいでございます。そこが其の布の値打の所で……」

「さういふとばかりに老人は云った。」

「若い女子の喜びそうな色だ。なんと老人そうでは無いかな。」

「はい左様でございます。」

「ここら辺にはお邸も多い。若い女子も沢山居る。お邸方の奥向へ参って若い姫達のお目にかけたら喜んで飛び付いて参ろうぞ。」

「今日も昨日も一昨日も、もう彼は十日余も、お邸方へ参上致し、さまざまご最負にあずかりましたが、この布ばかりは買っていただけ、一巻だけ残りましてでございます。」

「誰人の嗜好にも合わないと思えるな。」

「皆様、恐ろしいと申されます。」

「なに恐ろしい？」と不思議そうに「はて何が恐ろしいのか？」

「そのお色気でございます。」

「色気と云っても、紅いだけではないか。」

「人間の血で染めたような、燃え立つばかりの紅い色が、恐ろしいそうでございます。」

「アッハッハッハッ、馬鹿な事を。さすがは女子、臆病なものだな。」

二

もう一度布を差し上げて、月の光に照らして見たが、庄三郎は思わず身顫いをした。

と、布売の老人は有るか無しかに嘲笑ったが、

「お侍様、貴郎迄が……」

「何！」

と庄三郎は振り返る。

「顔えておいでなされます。」

「痴けた事を！」

と一喝したが、「これ、この価なんぼうじゃ？」

「太鼓判一枚でございます。」

「それ持ってけ！」

と抛り出した。チリンと鳴る金の音。屈んで拾う布売の姿が恰も大蜘蛛の這ったように、地面に影を描き出したが、颯と吹いて来た夜風に桜の花がサラサラと散り、その影をさえ埋めようとする。

×

斯ういうことのあったのは永祿元年のことであるが、この夜買った紅巾の崇りで、土屋庄三郎の身の上には幾多の波瀾が重畳した。

併し作者は其の事に關して描写の筆を進める前に、土屋庄三郎其の人に就いて少しく説明しようと思う。

武田家に於て土屋といえは非常に立派な家柄であつて、無論甲陽二十四将の一人、代々武功の士を出したが、別けても惣藏昌恒は忠義無類として知られていた。

後年勝頼が四方に敗れ小山田信茂には裏切られ、天目山で自尽した時、諸将殆ど離散した中に、惣藏一人己が子を殺し、一心無きを現わした上、最後のお供仕った程で、この義烈には敵乍らも徳川家康が感心し、苦心して遺族を尋ね出し常陸土浦九万石に封じた。土屋子爵は其の後胤である。家康も仲々粹の事をする。尤も家康は信玄の為に曾て三方ヶ原で破られ乍らも甲州流の兵法には少なからず敬意を払っていた

し、清和源氏の名門で甲斐源氏の棟梁たる武田家その物に対しても尊敬の念を持つていて、勝頼の首級に對しても、信長のように足蹴にはせず、君、武勇に於かせられては父君にも勝らせ給えど、いまだ年若くおわせしたため跡部長坂の小人を愛し武功の老臣を斥け給い、無謀の軍を起こされし果て今日の非運を見給うは洵に無残の限りであると、鳥渡首級桶を戴いてホロリと一滴こぼしたそうで、是を聞いた武田の遺臣共、武骨者だけに感激するのめ早く、我も我もと安い月給で徳川家に随身したそうであるが、是を今日の皮肉極まる歴史家共に云わせると「なあに夫れも家康という狸爺のお芝居さ。勝頼の首級をいただいた所で別に資本がかかるのでは無し、ホロリと一滴こぼしたところで其の為め眼病になりもしない。一滴の涙が大効を奏し数度の戦いに心身を練った武田家の遺臣を儲うことが出来たら、こんな旨い商売は無いよ。」と唯物的に片付けて了うが、治まれる御世の時代と戦国時代とは人心が異う。そう味もなく片付けては、歴史の花たる戦国武士に對し、ちと失礼ではあるまいか。

それは兎も角土屋家なるものは、武田家に在りては由緒ある名家で、一族の数も多かったが、信玄時代では惣藏昌恒が、土屋宗家の当主であつた。そうして「神州頼頼城」なる此の物語の主人公土屋庄三郎昌春は実に惣藏の甥なのであつた。

そうして庄三郎は孤児であつた。

庄三郎本年二十歳。十六年前四歳の頃に、父母と別れて了

ったのである。と云って父母は死んだのでは無い。行衛不明となつたのである。

庄三郎の父は庄八郎と云って惣藏の直ぐの弟であつたが、武勇にかけては一族の中でも並ぶものの無い武士であつて、有名な海口の戦では一番乗をした程である。

天文五年十一月、武田信虎八千を率い信濃海口城を襲つたが城の大將平賀源心善く防いで容易に陥落しない。十二月となつて大雪降り、駆引ほとんど困難となつた。さすが猛將の信虎ではあつたが、自然の威力には叶うべくも無く見す見す城を後にして一旦軍を帰えすことになつたが勿論心中は無念であつた。此の時晴信（信玄）十六歳、父に従つて軍中に居たが自分の陣中へ歸つて来ると腕を組んで考え込んだ。と、其処へ顔を出したのが土屋庄八郎昌猛である。庄八郎此の時十九歳、晴信よりは三つ上であつて、お側去らずの寵臣であつた。

「殿、何となされましたな？」心配そうに訊いたものである。

「莫迦な話だ。退陣だそうな。」晴信は顔を擧めたものだ。

「雪が深くございますからな。」顔を見い見い庄八郎は云う。

「雪が深い？それが何うした！冬になれば雪も降るよ。降つた雪なら積りもしようさ。莫迦な話だ。」と益々不機嫌だ。

「寒さが厳うございますからな。」庄八郎は復た云つた。顔を見い見い云うのである。

三

「何を申すか。つまらない事を。」

晴信はギリリと庄八郎を睨む。

「敵として人間でございます。矢張り寒うございましょうよ。」

此の言葉には意味がある。で、晴信は黙っていた。

「甲州勢退くと見るや、城兵一時に安心し、凍えた身肌を暖めんものと甲を脱ぎ鎧を解き弓矢を捨て刀鎧を鞘にし……」「わかつた！」

と不意に晴信は庄八郎の言葉を遮つた。

それから父の前へ出た。

「殿致し度うございます。」斯う晴信は云つたものである。すると信虎はカラカラと笑い、嘲けるように斯う云つた。

「この大雪には城兵と雖、門をひらいて追つては来まい。追ひ縋る敵の無いを知つて殿を望むは卑怯であらうぞ。」

併し晴信は動じようとせず「殿いたしとうございます」と只繰り返えすばかりであつた。

で、許されて陣中へ歸ると、すぐに晴信は庄八郎を呼んだ。ここで密談が行われる。夫れからの事は頼山陽が、作者のような悪文で無く非常な名文で書いている。

以三兵三百殿。後三軍二数里。止舍。親警其兵二日。勿積甲。勿卸鞍。食於馬而後食。五更即發。唯吾所獨是視。兵皆竊嗤是曰。風雪如此。何為警。五更。晴信即

発。還向海口。与三百騎冒雪馳。味爽抵城。源心已散遣其兵。独与百人留守。晴信分兵為三。自以三隊入城。二隊揚戰城外。応之。城兵不測其衆寡。不戰而潰。乃斬源心。以其首歸獻。一軍大驚。云々。

是は驚くのが当然である。而して此の計を献じたのも、敵將源心を討取ったのも皆土屋庄八郎であつた。

其の後晴信は父を逐い自甲斐の太守となつたが、晴信をして父を逐わせたのも、庄八郎の献策からであつた。

さすが寅歳の産れだけに信虎は豪勇の性格であり、その性格が役立って、甲斐国内の豪族共、即ち都留郡の小山田氏、東郡の栗原氏、河内の穴山、逸見の逸見氏、又西郡の大井氏などを權威を以て抑え付け、悉く臣下と為たばかりか、隣国信濃では平賀、諏訪、又小笠原氏、村上氏、木曾氏なども兵を構えて甲斐武者の威を輝かせたが、永正十七年飯田河原で遠州の大兵を破つて以来、すっかり天狗の鼻を高め、暴戻の振舞が多くなり無闇と家来を手討にした。累代の四臣と云われた所の馬場虎貞、山県虎清、工藤虎豊、内藤虎資、四人乍ら手討になり、この他硬骨の士五十人、刀の錆となつたのであつた。

そこへ起こつたのが家督問題で、森厳沈痛の晴信よりも颯爽輕快の次子信繁の方が、信虎の性質に合う所から、それを家督に据えようとした。

驚いたのは老臣共で憤慨したのは晴信である。そうして妙策を献じたのは土屋庄八郎昌猛であつた。

「殿、ご心配には及びませぬ。今川をお頼みなさいまし。」当時今川義元と云えば駿遠参の大管領で匹儔の無い武将であつたが、信虎の一女を貰つていたので晴信に執つては姉婿に当たり日頃から二人は仲が宜かつた。

「成程、これは好い勘考だ。」晴信は嬉しそうに頷いたが「大事な智慧を是で二度迄俺はお前に借りて居る。疎には思わぬぞよ」

庄八郎の手を取つて押戴いたということである。信虎は間もなく騙られて、今川家へ幽囚され、甲斐の国は何んの波瀾も無く晴信の物となつたのであつた。

土屋庄八郎昌猛は是程勝れた人物であつたが家庭的には不幸の人で、高坂弾正の娘であり己が妻であるお妙の方を信ずることが出来なかつた。お妙の方には恋人があつた。娘時代からの恋人で行々は其人の妻となり楽しい家庭を作らうものと堅く信じていたらしい。其恋人は他ならぬ庄八郎の弟の土屋主水昌季であつた。

主水は兄の庄八郎や又長兄の惣藏が武勇一図の人間であるのと大いに趣を異にして極わめて文雅の人物であつた。容貌も秀麗風姿も典雅、和歌詩文にも長けていて、今日信玄の作として世に知られている和歌の多くは洵は主水の作であつた。

甲州一の宮浅間神社に詠進したる短冊の和歌「うつし植うる初瀬の花のしらゆふをかけてぞ折る神のまにまに」も、文字こそ信玄の真蹟であれ歌は主水の作なのである。此の他彼

の秀逸としては、

いはと山緑も深き柳葉をさしてぞ祈る君が代のため
君を祈る賀茂の社のゆふたすきかけて幾代か我も仕へん
うきものを寢覺の床の曙に涙ほしあへぬ鳥の声かな

四

是等の和歌でも想像されるように、主水は敬虔の心を持った柔和な人物であつたので、恋人を兄に横取りされても執拗く怨むような事も無く寧ろ諦めていたのであつた。そうして恋人お妙の方も、穩しい真面目の女性だったので、既に其の恋が破られてあらぬ人の妻になつてからは、努めて良人に貞節を尽くし、主水との恋は心の墓場に潔く葬ることにした。併し主水と庄八郎とは血を分けた真実の兄弟である。それこそ二人は毎日のように顔を合わせなければならなかつた。自然お妙とも顔を合わせる。木石で無い男女だ。血の騒ぐのは当然である。それが庄八郎には不快である。

息苦しい恋の三角關係！それが五年間続いたのであつた。そうして庄三郎の四つの時、突然主水の姿が消えた。やや有つてお妙が行衛不明となり続いて庄八郎が身を隠した。爾来今日迄杳として三人の行衛は知れないのである。

孤子となつた庄三郎は、同族土屋右衛門が、快く引取つて養育したが、父母の無い子は何処か寂しく何処か偏したものであつて文にも秀で、武にも勝れ母に似て容姿も美しく天晴

れ優美な若武士であつたが、所謂詩人的氣稟とでも云おうか、憂鬱であつて加之快活、真面目であつて加之滑稽、そうして常時瞑想的で現実の事を好まなかつた。

庄三郎はよく云つた。

「……ね、俺は斯う思うのだ。俺の両親は活きているよ。しかし一緒に住んでいない。自由に別々に住んでいるのだろ。父は父らしい活方だね。母は母らしい活方でさ。そうして主水叔父さんも云う迄も無く活きているのさ。ああ俺には主水叔父さんがどんなに懐しく思われるだらう！歌人だつたというのだからね。併し無論父や母は夫れにも増して恋しいよ。どうぞ一度逢いたいものだ。俺は堅く信じているよ。いずれは屹度逢えるものだね。見るがいい美しいあの雲を！夕陽に輝いているじゃないか。あの雲の奥にいますのだよ。父と母と叔父とがね。」

×

土屋庄三郎昌春は、翌朝早く眼を醒ますと枕上へ眼を遣つた。紅巾がちゃんと置いてある。

「うむ、夢では無かつたか。」

呟き乍ら起き上がると、紅巾を持って縁へ出た。顔を出したばかりの朝の陽が夢見山の頂から御館の家根を輝かせ、庭の木立の隙を潜り泉水へ落ちる筈の水を黄金色に染め上げてカッと縁まで射していたが、そのすがすがしい光の中へ、つと紅巾を差し出すと綴目の糸をブツリと切り、解きほぐしたり裏返えしたり陽に照らして打ち眺めたが、



「はてな。」

と云って首を捻った。

それから更に改めて、打返し打返し眺めたが、

「見えぬ！」

と不思議そうに呟いた。で、じっと考え込む。

その時、サラサラと音を立てて老人の下僕が主屋の方から落花を掃き乍ら近寄って来たが、

「若様、お早うございます。」と掃く手を止めて挨拶した。

「おお甚兵衛か。早起だな。」庄三郎は挨拶を返えし其の儘じっと考え込んだ。

花を踏み踏み幾十羽の小鳥が庭の木立で啼いている。声を咽らした老鶯が白い杏の花の間で間延びに経を読んでいる。山国の春の最中らしい。

「甚兵衛。」

と不意に庄三郎は呼んだ。「まあ鳥渡ここへ来い。」

「はい、ご用でございますかな。」

「何んと綺麗な布ではないか。」

云い乍ら紅巾を差し出した。

「や、これはこれは御綺麗御綺麗。眼が覚めるようでござりますなあ。何処でお需めになりましたな？」

「うん、少しく訳があつて、計らず手に入れた紅巾だが、これ甚兵衛よく見えてくれ。そこらに文字が書いてないかな？」

「は？」と甚兵衛は訊き返えす。「あの、文字と有仰いますと？」

「この布に文字が書いてある筈だ。」

「へへへ、左様でございますかな。どれ夫れではもう一度、
こう云い乍ら甚兵衛は繰返し布を調べて見たが、文字は愚
傷さえも無い。」

「今年私は六十五。眼も駄目になりました。何んにも見
えませんがございます。」

「ふうん、お前にも見えないかな。」

「はい、そうして若様には？」

「実は俺にも見えないのだ。」

「さてはお嬬りなされましたな。」

「併し昨夜はよく見えた。」

五

「それは本当でございますかな。」

「俺は思わず願えたものだ。」

「何んと書かれてございましたな。」

「月の光に黒々と、冒頭に『謹製』と書かれてあった。」

「謹製？ ははあ、謹製とな？——それから何んとありまし
たな？」

「『土屋庄八郎昌猛』と、斯う鮮かに書いてあったぞ！」

上衣に裁っても下衣に裁っても十分用に足りるだけの幅も
長もあったけれど、不思議のことには其の紅巾は蟬の羽根の

ように薄い所から、掌の中へ握られる程に又小さくもなるの
であった。併し何よりも驚く可きは其の美しい色艶で、燃え
立つばかりに紅かったが、単に上辺だけの紅さでは無く、底
に一抹の黒さを湛えた小気味の悪いような紅さであり、恰度
人間の血の色が、日光の加減で碧くも見え又或る時は黄色く
も見え又黒くも見えるように、その紅巾も日光の加減で様々
の色に見えるのであった。

「うむ、宛然玉虫のようだ。」

庄三郎は斯う思い乍ら、その気味の悪い紅巾に次第に愛着
を覚えるようになった。

「兎に角一度でも俺の眼に父上の御名の現れた布だ。多少の
縁が無いとは云えまい。」

こうも思つて紅巾を肌身放さず持つ事にした。

×

總て桜が散り山吹が散つた。芒の芽が延びて来た。春が倏
忽と逝つたのである。五月雨、木下闇、蚊の呻、こうして夏
が来たのである。

甲斐の盆地の夏景色は、何んともいえず涼々しく、釜無河
原には常夏が咲き夢見山には石楠花が咲き、そうしてお館の
木深い庭を螢が明滅して飛ぶようになった。

或夜、信玄は十数人の家来と、中曲輪の密房で、一枚の地
図を中にして劔に軍議に更けていた。

第一の寵臣高坂弾正、兵法知の山本道鬼、勇武絶倫の馬場、
山県、弟信繁、子息義信、伊那の郡代四郎勝頼、土屋惣藏は

云う迄も無く、特別を以て庄三郎も軍議の場所に列せられ、尚他に諸角豊後、穴山梅雪、武田追遙軒、板垣駿河、長坂釣閑、真田弾正同じく昌幸、円座を作つて居流れた様は、堂々として由々しかった。

名に負う永禄元年と云えば、上杉謙信を相手とし、信州更級川中島で三回寄合つた合戦の中、二回目を終えた翌年のことで武田家に執つては榮華の絶頂、士氣の盛んな時代であつた。

「庄三郎。」

と、信玄は、深味のある声で不図呼んだ。

「はっ」と云つて手を仕える。

「其方の父を思い出すぞよ。」太い眉を動かしたが「庄八郎は勇士であつたぞ。又思料にも富んで居た。思案に余つた折は、俺は何時も思い出すぞよ。」

「有難いお言葉に存じます。」

「其方も父に肖らずばなるまい。」

「努めては居りますなれど……」

「不肖の子と云われるなよ。」

「恐れ入つてございます。」

「浮世の事、一切力だ！力を養わずばなるまいぞ。」

「お言葉有難く存じます。」

「よいよい。」

と云つて信玄は、素絹の袖を左右に張ると、トンと軍扇を膝に突いた。

再び軍議に入ったのである。

衆人の前で父の事を斯うあからさまに褒められて、庄三郎は嬉しくもあり又晴がましくも思われたかポツと顔を上気させ、恍惚とした眼使いで地図の面を無心に見た。と、その地図の真中へ、ポタリ、ポタリ、ポタリ、ポタリと、上の方から血が滴つて来た。驚いて天井を見上げると、檜の板を深紅に染めて生血が四角に染み出している。

「あつ。」と口の中で叫び乍ら再び地図へ眼を遣ると、依然として落ちて来る血の滴で、地図は深紅に染まつたが、不思議のことに誰一人として夫れに気が付くものが無い。

「む。」と思わず呼吸を呑み、再び天井を見上げた途端、四角に染み出していた板の血がヒラヒラと剥けて落ちて来た。と、宙でクルリと廻わり其の儘空間に浮いたかと思ふと静かに左右に揺れ出した。

血で無くて夫れは紅巾であつた。

庄三郎は顔色を変え素早く懷中へ手に入れたが有るべき筈の紅巾が無い。

庄三郎は場所柄を忘れ思はず、ぐと立ち上がった。一度に座中の視線が向く。は、と気が付いて坐わろうとすると、恰も庄三郎を誘うように空に浮かんだ紅巾が、戸口の方へ舞つて行つた。

嚴重に鎖ざされた戸口の扉が、其の時忽然と内側から開き、長い廊下が現われた。

その廊下を煙のように又紅の鳥のように飄々と紅巾は舞つ

て行く。

吾を忘れて庄三郎は紅巾の後を追ったのである。

六

人は城人は石垣人は濠情は味方あだは敵なり

是は信玄の歌であるが、どうやら代作ではなさそうである。拙いのが其の証拠だ。

芸術として見る時は目鼻のつかない代物ではあるが、併し信玄の心持はよく此の一首に現わされている。

躰岡ヶ崎の信玄の館は文字通り館で城ではなかった。面積東西百五十六間。そうして南北は百六間。一丈ばかりの土手を巡らし一重の塙が掘られてある。要害といえはただで区内に三つの曲輪があつて、東曲輪、西曲輪、中曲輪と称されていた。

東曲輪の大きさは、二十四間に六十間で、三つのうちで最も小さく、中曲輪は信玄の居所、築山泉水毘沙門堂など多少風致を備えていた。西曲輪は姫嬪の住坊、人質曲輪とも呼ばれていた。

館を囲繞し稍南寄りに甲府の条坊が出来ていた。東西五百三十間南北九百二間というのが即ち条坊の総面積で、諸將の邸宅も此処にあった。城屋町には真田彈正、甘利備前守、山県三郎兵衛、城織部も此処にいた。柳町通りには高坂彈正、穴山梅雪、馬場美濃守、曾根下野守、小山田備中守、諸角豊

後守が住んでいた。又増山の通りには内藤修理亮、板垣駿河守三枝勘解由、多田淡路守、典厩武田信繁も居た。一条小路には小山田大学、土屋右衛門、蘆田下野守、原加賀守、長坂釣閑、大熊備前守、山本勘助、初鹿源五郎、跡部大炊介、今沢石見、小幡尾張守、下条民部、栗原左衛門、保科彈正、一条右衛門。尚館の東北には横田備中守の邸があり又館の北側には武田逍遙軒が控えていた。

曲輪を抜け渥を飛び越え、若い一人の侍が、森然と更けた町々を流星のように駆け抜けた時、折悪く道で邂逅した人は何んなに驚いたか知れなかったであろう。

その侍こそ庄三郎で、飛行する紅巾に誘われ、何処とも知れず走るのであつた。

闇の夜にもかかわらず、庄三郎の鼻先から一間余の空間を恰度燃えている焔のように、飄々と紅巾は飛んで行った。捕らえよう捕らえようと手を延ばして幾度握んだか知れなかったが其の都度紅巾は手から遁がれて先へ先へと飛ぶのであつた。

併し夫れでも漸くのことでは彼は紅巾を引っ握んだ。

「さあ捕らまえたぞ！」と嬉しそうに、狂人のように笑った途端、グラグラと眼が廻わった。そのまま庄三郎は氣を失い、闇の中に倒れたのである。

「もし、お若いお侍様！」

斯ういう呼声が聞えたので庄三郎は眼を開けた。

第二回

陽がカンカンと当たっている。青々とした高原が眼路の限りひらけている。そうして全身をあらわした藍色をした富士山が、庄三郎の眼前に聳えていた。

「あっ。」と驚いて起き上がった時、

「どうなさいましたお侍様。」と、優しく尋ねる声がした。見ると老人が立っている。

「老人。」と庄三郎は先ず云った。「此処は一体何んという所だ？」

「富士の裾野でございます。」老人の答えは平凡である。杓夫と見えて木を背負っている。

「富士の裾野は解っている。其の他には名はないかな？」

「三道の辻と申します。」

「三道の辻？ 妙な地名だな。」

「ここに辻がございます。路が三本分れて居ります。」

「いかにも三本路がある。」

「東へ行けば富士のお山、西へ辿れば本栖の湖、北へ帰れば人界でございます。」

「いや人界とは面白い。それでは他は魔界かな。」

庄三郎は笑い乍ら云った。

「はい、魔界でございますとも。」

老人の言葉は真面目である。

庄三郎が驚いて思わず其の眼を見張った刹那、人馬の音が聞えて来た。次第に此方へ近付いて来る。

パッパッパッパッ……蹄の音。

チャンチャンチャンチャンと金具を響かせ二三十騎の騎馬武者が何うやら此方へ来るらしい。俄に老人は周章て出した。

「さあ大変だ。隠れなければならない。此方へ此方へ。」

と云い乍ら庄三郎の袖を引き山査子の茂へ引つ張り込んだ。庄三郎は胆を潰し、

「これ何をする。どうするのだ。」

「叱。」

と老人は眼で叱り「経帷子がお通りになる。そうだ血染めの経帷子かな。声を立てて見付けられたら私も其方も命が無い。黙って黙って。」と囁くのである。

チャンチャンチャンチャンと互に触れ合う甲冑物具鐙の音が其の間も次第に近寄って来た。

遠寄か夫れとも武者押か？何者が何処へ行くのであろう？